



## 市民に近い距離で接する活動。 きずなを深め、愛されるクラブに



トップチームの選手もホームタウンの小学校を訪問。サッカー教室は子供たちが一番楽しみにしている時間だ（写真は安田理大選手）  
©ガンバ大阪

### 選手も小学校訪問を楽しみに

7月6日、ホームグラウンドの万博記念競技場から約3キロ離れた吹田市立東佐井寺小学校。西野朗監督を先頭に、中澤聡太選手、宇佐美貴史選手が体育館に姿を現すと、すぐに児童の顔が輝いた。リフティングの実演に始まり、ミニゲーム、選手とのハイタッチ…。質問コーナーでは、宇佐美選手に「どんな練習をしているんですか」と興味津々にたずねる児童の姿もあった。

2003年にスタートした「ホームタウンふれあい活動」。選手とスタッフが数人ずつ10グループに分かれ、一日で計30校以上もの地元小学校を年に2回のペースで訪ねて回っている。4時限目に訪問した学校では児童に囲まれながら、給食も一緒に食べる。日本代表としてFI



給食の時間に児童の質問攻めにあう遠藤保仁選手 ©ガンバ大阪

FAワールドカップ出場に貢献した遠藤保仁選手も教室で児童からの質問攻めに笑顔を絶やさず、マイペースに給食を食べ、問いかけに答えていく。普段はグラウンドでプレーしている選手をごく身近に感じてもらうことが活動の目的だ。

7月5日の夜は名古屋でアウェイの試合があり、大阪に戻ったのは午前1時ごろだったが、午前9時半には選手たちそれぞれが担当の小学校に向かっていった。試合日程の合間を縫って活動するため、

強行スケジュールになることも多いが、今では選手の方も小学校訪問を楽しみにしている。これまでに計400校以上、のべ14万人近い児童と触れ合ってきた。「最初のころは小学校に行っても、ガンバのユニフォームを着ている子供なんて一人もいなかった。でも、今では20人ぐらい着ていることもあるんです」と事業本部の伊藤慎次グループマネージャーは話す。

Jリーグが発足した1993年当初、ガンバ大阪は大阪府全域をホームタウンとしていた。だが、94年には2万2000人を超えていたリーグ戦の平均入場者数は、96年から5年間、1万人未満に低迷。広すぎるエリアでは、地域活動がファン・サポーターの拡大につながらないことを痛感させられた。97年にはホームタウンを北摂・北河内地域の14市3町に縮小し、さらに2004年には吹田市、茨木市、高槻市を重点3市に設定。06年以降は豊中市を加えた重点4市を中心に活動している。より市民に近い距離で接していくことが大きなテーマだ。Jリーグ発足から17年、ユース出身の若手選手の中には、ホームタウン活動を間近で見てきた選手も増え、下平匠選手も「子供のときに選手と触れ合えたことがうれしかった」と振り返る。



伊藤 グループ  
マネージャー

### 社会貢献や青少年の健全育成

重点4市には担当スタッフを1人ずつ配置し、活動の幅を広げていくことに知恵を絞っている。地域で夏祭りがあればマスコットのガンバボーイがパレードに参加し、特設コーナーでうちわを配ったり、チアダンスチームのダンス教室を開いたり、イベントに積極的に参加。Jリーグ全体の入場者が微減傾向にある中で、ガンバ大阪の今季途中までのリーグ戦平均入場者数は1万6490人（8月10日現在）で、昨季全体の1万6128人に比べて、やや増加している。「ホームゲームの日にスタジアムの駐車場付近を歩いていて、きょうは自転車の数が多いかなと感じる日がある。地域の人が応援に来てくれるとうれしくなる瞬間です」と伊藤マネージャーは笑顔を絶やさない。

最近では地域密着を進めていく中で、社会貢献活動や青少年の健全育成にも力を入れている。5月下旬、関西地区では新型インフルエンザの感染が拡大し、学校が休校になるなど教育現場にも大きな動揺が広がった。そこで、手洗いやうがいへの励行を選手が呼びかけるビデオレターを製作。播戸竜二選手らがうがいを実演しながら、注意を呼びかけるビデオは重点4市の全小学校149校で活用された。学校内には選手がイメージキャラクターとなった、いじめ撲滅の啓発ポスターも目につく。今年1月には茨木市内の浪速少年院を安田晃大ら3選手が訪問し、在院者約100人と交流。少年院でのサッカー教室も開き、ミニゲームは活気に包まれた。

関西ではプロ野球の阪神タイガースが圧倒的な人気を誇り、甲子園球場はつねに満員に近いファンが詰めかけているが、スポーツ界ではむしろ特異な例であり、パ・リーグの球団に目を移せば地道に地域密着型を目指している球団も多い。昨年はアジア王者に輝いたガンバ大阪も今季は苦しい戦いが続き、人気クラブといえども危機感も募らせている。伊藤マネージャーは「地味で細々としている活動が多いかもしれないが、継続していくことが大事。地域とのきずなを深め、地元で愛されるクラブであることが必要」と意欲を燃やしている。

（産経新聞社 丸山 和郎）

スポーツを通じて豊かな社会の創造を目指す「Jリーグ百年構想」の実現に向けて、JリーグとJクラブはさまざまな施策を展開している。その活動の最前線ともいえるJクラブは、それぞれのホームタウンを中心に、地域の特色、実情などに応じて多彩なプログラムに取り組んでいる。地域に根差し、活力を与え、人々の交流と触れ合いを促進する、こうした活動を紹介するシリーズの16回目は、ガンバ大阪とFC岐阜にスポットを当てた。



## 32 FC岐阜



# 合言葉は「子供たちに夢を」。 総合地域型スポーツクラブとしての役目

### 自治体とのつながりの強さ

今年3月15日、J2のFC岐阜が、Jリーグ入会から2季目のホーム開幕試合を迎えた。本拠地の岐阜メモリアルセンター長良川競技場（岐阜市長良福光）に集まったファン・サポーターは6,803人。そのメインスタンドの最前列に、42枚のフラッグがずらりと並んだ。FC岐阜のエンブレムと岐阜県内にある各市町村のシンボルマークが盛り込まれた特製フラッグだ。

FC岐阜は今季、岐阜県内の42市町村すべてから出資を受けている。それぞれ100～300万円、多いところで2,000万円にも上る。各市町村には「FC岐阜担当」の職員がおり、年2、3回、集まってFC岐阜を支える支援連絡協議会を開くなど、自治体とのつながりが非常に強い。

FC岐阜は2001年、県サッカー協会などの後押しを受け、地域のシンボルとなる「総合地域型スポーツクラブ」として誕生。「岐阜からJへ」を目標に掲げ、Jリーグ入会への機運が高まるとともに東海社会人リーグ、JFL、J2へと一気に駆け上がってきた。しかし、もともと大きな企業が母体として存在したわけではなく、運営基盤は盤石といえない。

クラブは厳しい財政難を抱え、昨季の純損益は8,600万円の赤字、累積赤字は2億9800万円となり、債務超過は1億4100万円にも達した。「100年に1度」といわれる不況も財政悪化に拍車をかけ、スポンサー獲得に苦しんでいる。

こうしたクラブの存続すら危ぶまれるなか、岐阜県のバックアップを受けて、今季から県内すべての市町村が支援に名乗りを上げた。もちろん、その支援の原資となるのは税金。そんな県民200万人に支えられた「市民クラブ」のFC岐阜にとって、地域貢献は果たすべき使命ともいえるのだ。

### 選手、スタッフの地道な努力

今季の開幕前、すべての選手とスタッフが交代で42市町村を回り、特製フラッグを贈呈した。そこで「子供に夢を与えられるチームを目指している。地域と一緒に育っていきたい」と訴え



ホームスタジアムのメインスタンド最前列には県内の各市町村と協力して作った特製フラッグが並び ©FC岐阜

た。岐阜県のクラブとして成長していきたいという思いからだ。

地域貢献推進部参与の尾関新太郎さんは「出資していただいている以上、クラブとして何ができるかを常に考えている。FC岐阜が地域に溶け込み、地域がFC岐阜を必要とする。そんな相互関係を築いていくことができれば、と思っています」と、地域とのかかわりについて語る。



尾関 地域貢献推進部参与

サッカー教室、小学校や保育園の訪問、祭りやイベントへの参加…。選手たちの地域貢献活動は、実に年間130回を超える。ほぼ3日に1回のペースだ。練習を終えた選手たちが学校へ向かい、子供たちと一緒に汗を流す。今では「どうしたら子供たちにサッカーを楽しんでもらえるか」と選手自らが練習メニューを考えるほど、積極的に取り組んでいる。

また、オリジナルTシャツの売り上げの一部を植樹活動に充てる「FC岐阜エコプロジェクト」を昨季に続いて実施。Tシャツ1枚2,100円の販売代金のうち500円を県森林公社などに寄付、秋には学校などに植樹する活動が続いている。選手、スタッフによる地道な努力は、地域貢献の幅を広げ、地域とのつながりをますます強めている。

### 地域貢献へのさらなる可能性

こうした取り組みを支えているのが、「岐阜で唯一のプロスポーツ」であるという誇り。尾関さんは「広い県土を持つ岐阜には、さまざまな文化、自然がある。これからは、そのことをもっとアピールしていく活動にかかわっていきけるよう、クラブから自治体にプレゼンしていくことも必要」と提案する。

これまで小学生を対象に飛騨の自然の中で過ごす「チャレンジキャンプ」や、岐阜を代表する伝統文化の長良川鶯飼選手とともに観覧する交流会を企画。尾関さんは「Jリーグに入会したことで、全国からもファン・サポーターの方が岐阜に来ていただけるようになった。J1に上がれば、交流人口はさらに増加し、岐阜県の観光振興につながる」と将来を見据える。

単なるスタジアムへの集客を図るだけの活動に終わらせたくない。FC岐阜を通じて、より岐阜のことを知ってもらい、岐阜のことを好きになってもらいたい。そんな思いを抱き、地域貢献へのさらなる可能性を信じている。

合言葉は「子供たちに夢を」。JFL時代から唱え続けている、この言葉に込められた願いとは。尾関さんは「人と人とのつながりが薄れている昨今、誰かと触れ合える場や、世代を超えたコミュニケーションの場をつくっていく。将来を担う子供たちが夢を持てる街にしていきたいし、そこにFC岐阜がかかわっていただければうれしい。それが総合地域型スポーツクラブとしての役目だと思っている」と強調する。

サッカークラブのある町。その意味を考えながら、地域とともに歩んでいく。

(岐阜新聞社 根尾 文悟)



エコプロジェクトのオリジナルTシャツを着る古田肇 岐阜県知事(中央)。その左は今西和男 代表取締役社長 ©FC岐阜





# Report

レポート



「2009 Jリーグ U-12フェスティバル」が、子供たちにとっては夏休みの期間となる8月3～27日に、全国の7会場で行われた。昨年の宮城県、群馬県、長野県、静岡県、岐阜県、愛媛県に加え、今年は新たに茨城県でも開催。Jクラブのチームだけでなく、地域のチームや海外からのチームも合わせ、合計81チームが参加。8人制を中心とした補欠ゼロの試合をはじめ、自然体験やASE（一人では解決できない課題を、メンバーの協力により解決する活動）、地域文化体験など、楽しみながら豊かな人間性、協調性をはぐくむ活動も経験した。また、PR（プロフェッショナルレフェリー）も参加し、試合のジャッジやフェアプレー講習会を通し、フェアプレーの大切さへ思いを新たにしました。

長野県さじま平において開催されたフェスティバルでは、2面増えたピッチで豊富な試合が組まれた。2日目には混成チームによるミニサッカー大会、地域の伝統芸能鑑賞、バーベキューなど、他チームとの交流を目的とするプログラムが行われ、締めくくりとなる各クラブ紹介のころともなれば、貴重な体験を共有した仲間として大いに盛り上がっていた。

群馬県みなかみ町のフェスティバルは、「どのような状況でも自分で考え、判断する能力を身につけること」をコンセプトにしたプログラムを実施。チームに分かれてのハウス作りなどが行われ、毎回メンバーを変えた試合（クアトロサッカー）も行われるなど、「うまくなるため、楽しむためにはどうすればいいかを考える」（ジェフユナイテッド千葉の池上正コーチ）工夫が施された。

※他会場の模様はJリーグ公式ホームページのホームタウンレポートをご覧ください。



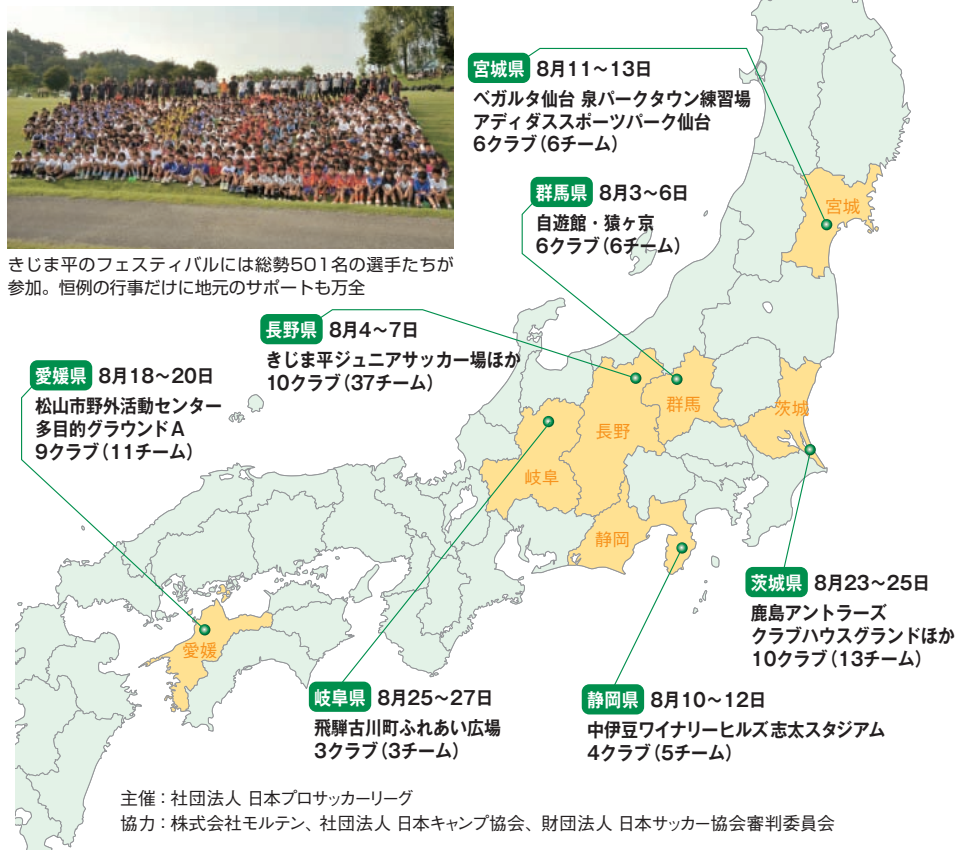
試合は8人制が中心。普段はなかなか対戦機会のない相手との試合は、大いに刺激となったようだ（さじま平）

## 2009 Jリーグ U-12フェスティバル

# チームの枠を超えて 貴重な交流と体験



さじま平のフェスティバルには総勢501名の選手たちが参加。恒例の行事だけに地元のサポートも万全



みなかみ町で行われたハウス作り。地元の大工の方々のアドバイスを受けながら、メンバーが協力。完成したハウスに宿泊もした



川遊びなど自然と触れ合うプログラムも多彩。子供たちには、夏休みの忘れられない思い出となったに違いない（みなかみ町）



楽しみなバーベキュー。他チームの仲間ともすぐに打ち解ける（さじま平）



一人では難しい課題でも、力を合わせれば難なくクリア（さじま平）



「木島平村について学ぶ」。地元の皆さんの企画・協力によって紙すきを体験した子供たち



「Jリーグニュース」は100%再生紙を使用しています。